

学位論文題名

マーシャル経済学における心理学的基礎

— 初期心理学研究と経済学の連関をめぐって —

学位論文内容の要旨

アルフレッド・マーシャル(Alfred Marshall, 1842-1924)は、後期ヴィクトリア朝に活躍した経済学者であり、後継者に A.C. ピグーや J.M. ケインズなどの経済学者を擁するケンブリッジ学派の創始者として知られている。マーシャルは、経済学者の道に進む以前、人間の能力が発達する可能性を探求するため、心理学の研究に従事していた。したがって、本論文の目的は、マーシャルの初期心理学研究と経済学の連関を綿密に検討することを通じて、マーシャル経済学が初期の心理学研究に基礎づけられていることを明らかにすることにある。

通常、マーシャル経済学として理解されているのは、彼の主著『経済学原理』(第八版, 1920年)において展開される部分均衡理論——各市場における需要と供給の逐次的な均衡の導出に関する経済理論——であろう。しかし、マーシャルにとって部分均衡理論は、動的な経済現象を理解するための準備や訓練を提供する一時的な補助手段にすぎなかった。マーシャルは、経済の有機的な成長——人間と経済・社会の相関的な進歩——を経済学において考察しようとしたのである。

そこで、本論文は、マーシャルの初期心理学研究論文、マーシャル経済学の諸著作、そして、晩年のマーシャルの回想という三つの要素を、初期心理学研究と経済学の包括的な連関を意識して検討することから、彼の経済学——とりわけ、人間と経済・社会の相関的な進歩に関する分析——が、初期の心理学研究によって基礎づけられていることの明確化を試みた。

本論文の構成は、全六章である。

まず、第一章では、本論文における問題設定を行い、先行研究の検討を通じて、本研究の問題意識を明らかにした。

第二章では、マーシャルの初期心理学研究と経済学に包括的な連関が存在することを明らかにし、本論文全体を貫く分析上の基本姿勢を導出した。

第三章では、まず、マーシャルの初期心理学研究論文で扱われた共感の概念について詳細に検討した。そして、マーシャルの共感の概念が H. スペンサーを介するかたちで、A. スミスから影響を受けたものであることを明らかにした。さらに、それらの考察を踏まえて、マーシャル経済学において、人々の共感という道徳的能力が、教育を通じて労働者階級とビジネスマンの双方にとって重要な役割を果たしていることを析出した。

第四章では、マーシャルのいう人間と経済・社会の相関的進歩が、1875年のマーシャルのアメリカ研究旅行に起因していることを論証した。マーシャルの有機的な経済発展理論の源泉は、彼がアメリカに見出した経済発展と人々の倫理的成長の関係に求めることができる。また、マーシャルの初期心理学研究を踏まえて、アメリカにおける人々の倫理的成長を考察することによって、マーシャルの「アメリカ産業の諸特徴」(1875)における議論をより明確なものにした。マーシャルは、アメリカ研究旅行から帰国して以後、つまり1875年以降、人間と経済・社会の相関的進歩を自らの経済学において前景化させていくのである。

第五章では、マーシャル体系における人間研究の意義を検討した。すなわち、マーシャルの学問的移行の原因や、彼の強調した「経済学者のメッカ」などの議論を俯瞰的に考察することから、晩年におけるマーシャルの理想が初期心理学研究にあったことを明らかにした。マーシャルにとって、人間の能力が発達する可能性を探求する初期の心理学研究は魅力的なものであった。このようにして、マーシャルが、経済学者の道を進むと決意した後も、一貫して人間本性の研究に注意を向けていたことを明らかにした。

最後に、第六章では、これまでの議論の要約を行い、第二節において、本研究の意義を明らかにし、第三節において、今後の展望について言及した。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 西 部 忠
副 査 教 授 佐々木 憲 介
副 査 准教授 橋 本 努

学 位 論 文 題 名

マーシャル経済学における心理学的基礎

－初期心理学研究と経済学の連関をめぐって－

本論文（A4版全108頁，目次，序文，第1章～第6章，参考文献を含む）は，ケンブリッジ学派の創始者アルフレッド・マーシャル(Alfred Marshall, 1842-1924)の経済学体系が自らの初期心理学研究によって基礎づけられていることを明らかにすることを目的としている。一般に，マーシャルは，ミクロ経済学における部分均衡論の構築者として知られているが，彼の経済学研究の目的は，静態的均衡理論の枠組みで捉えることができない経済社会の動態的成長を説明することにあつた。そこで，本論文では，彼の初期心理学研究論文，経済学の諸著作，晩年の回想という主に三つの文献資料を検討することから，初期心理学研究と経済学の間に包括的な連関が存在すること，また，マーシャルが経済学において志向した人間と経済・社会の相関的進歩に関する分析こそいわゆる有機的な経済成長理論であることを示そうと試みている。

まず第一章で，本論文における問題設定を行い，先行研究の検討を通じて本研究の問題意識を明確にした上で，第二章で，マーシャルの第三心理学研究論文「機械論(Ye Machine)」を詳細に検討することから，初期心理学研究論文と経済学に包括的な連関が存在することを明らかにしている。心理学研究における「人間の性格」に関する考察は，彼の経済学における「人間本性」の理解の基礎を形成している。ここで，本論文を貫く心理学と経済学の関連に関する分析上の基本姿勢が析出されている。

第三章は，まず，マーシャルの初期心理学研究で扱われた共感の概念を考察している。マーシャルは第二心理学研究論文において，スペンサーの共感の概念を高く評価した。マーシャルが参考にしたスペンサー『社会静学』では，アダム・スミスの「想像上の立場の交換」を基礎にして共感の概念が展開されている。このため，マーシャルの共感の原理が，スペンサーを介するかたちで，アダム・スミスから影響を受けたものであると考えられる。次に，松山氏は，これらの考察を踏まえて，マーシャル経済学における共感概念と進化概念の関係について論究している。マーシャルは，「機械論」において共感概念と自然選択の関連を指摘したが，この議論が彼の主著『経済学原理』において前景化されていることを示し，彼の中で共感に関する議論が初期心理学研究から一貫していたことを論証している。

第四章では，マーシャルの考えていた人間と経済・社会の相関的進歩が，1875年のアメリカ研究旅行によって彼が得た知見に基づいていると論じている。マーシャルは，アメリカの経済や社会の進歩を説明する際，トクヴィルやヘーゲルの議論を援用することによって，自らの主張に理論的根拠を与え

た。彼がアメリカに見出した経済発展と人々の倫理的成長の関係こそ、人間と経済・社会の相関的進歩に関する基本的な枠組みなのである。

第五章では、マーシャルの研究遍歴を俯瞰的に考察することを通じて、マーシャル体系における人間研究の意義を検討している。マーシャルは、晩年ビジネスマンを対象にして経済学を展開しており、経済学には消費者心理などの帰納的観察を行う社会心理学が必要であると考えていた。その反面、探求の楽しみを求め、自らの理想として位置づけたのは人間の能力が発達する可能性を探求する初期の心理学研究であった。これは、マーシャルが経済学者の道を歩んだ後も一貫して人間本性に関心を寄せていたことを示している。

最後の第六章では、各章を要約し、本研究の意義を指摘して、今後の展望を述べている。マーシャルの考える経済や社会の進歩は、家庭内教育、教養教育、技術教育といった教育を原動力とするものである。共感に動機づけられた行動をとり、時に自己犠牲を進んで行うような社会的特性と道徳的能力を持つ経済主体の自由な活動によって初めて経済や社会の進歩が実現される。松山氏によれば、マーシャルの展開した有機的な経済成長の基本的なメカニズムは次のように説明することができる。人々は、教育を受けることによって道徳的能力を養い、産業上の能率を向上させる。人間と経済・社会の相関的進歩によって国民分配分や一人当たりの賃金の増大がもたらされる。人々は、増大した稼得によって教育に資本を投下する。充実した教育を受ける機会を獲得した人々は、肉体的・知的・道徳的能力を発達させるため、さらに経済発展が促される。このような共感の原理は初期心理学論文「機械論」において詳細に検討されたが、さらに共感の概念と進化の概念の関係は、晩年の主著『経済学原理』において生物学的発想に依拠するかたちで初めて展開されたのである。

以上で概説した本論文の学説史上の独自の貢献は、マーシャル経済学の全体系が初期心理学研究に基礎を持ち、とりわけそれが共感概念を中心にして展開されうるものであることを示した点にある。旧来のマーシャル研究では、安楽基準、生活基準、複合的準地代などの経済的概念を国民分配論に適用することによって、有機的な経済成長理論を解釈しようとする試みがなされてきたが、マーシャルが経済学を人間研究の一部として位置づけたことをいかに説明するか、有機的な経済成長論において道徳的特性を獲得した人々がいかに経済や社会の進歩を導き出すのかといった論点が明確ではなかった。同時に、旧来の研究は心理学研究を等閑視した経済学的分析に偏ったものであり、彼の有機的成長論の特徴である「柔軟な人間本性」という課題も十分に考察されていなかった。松山氏は、本研究でそのような先行研究の欠点を克服するために、マーシャルの初期心理学研究を経済学との包括的な連関に注目して、人間と経済・社会の相関的進歩の分析をより明確なものにしようと試みた。そして、マーシャルの初期心理学研究を踏まえることによってはじめて彼の有機的な経済成長論を累積的な過程を進行する経済進歩として説明できること、それは道徳的能力である共感を備えた経済主体を前提にして展開されていることを示した。

審査では、マーシャルの共感概念のスミス、スペンサーからの継承関係、アメリカ研究旅行に対するヘーゲルの議論の意義などについていくつか疑問が提示され、また、マーシャルの経済学では心理学や有機的成長論が中心的な位置づけがなされていないという事実をどう解釈するかという問題も指摘された。このような課題が今後に残されているものの、本論文は、マーシャル体系における有機的成長論と初期心理学研究の関連というミッシングリンクを詳細に検討し、経済学における人間主体の社会的性質を問い直そうとする野心的な労作であり、自らが設定した問題にたいする解答を基本的に与えた点でも優れているので、本経済学研究科の課程博士（経済学）の学位を授与するに値すると審査委員会は全会一致で判定した。